

当院における皮膚科領域の体表超音波検査の現状

◎糸川 沙耶¹⁾、中島 佳那子¹⁾、井田 葉津季¹⁾、西村 はるか¹⁾、宇城 研悟¹⁾
松阪市民病院¹⁾

【はじめに】

皮膚科領域の体表超音波検査は、腫瘍に対して詳細に検査できるだけでなく、腫瘍周囲組織の炎症性変化や、患者の症状に合わせて柔軟に検査ができることから有用とされる。当院における皮膚科領域の超音波検査は、必要に応じて皮膚科医と直接ディスカッションを行っている。今回、皮膚科より依頼された体表超音波検査について現状を調査したので報告する。

【対象と方法】

2018年4月から2023年3月までの5年間に皮膚科より依頼された体表超音波検査468件（男性242名、女性206名、平均年齢63.0歳）を対象とし、依頼目的、超音波検査診断、病理組織診断について調査した。

【結果】

体表超音波検査468件のうち、依頼目的として最も多かったのは、皮下腫瘍の質的評価目的で308件（65.8%）、皮下腫瘍の術前評価目的56件（12.0%）、硬結部位や隆起部における腫瘍病変の検索目的51件（10.9%）、痛みや発赤部位に対する膿瘍形成などの検索目的30件（6.4%）、その他23件（4.9%）であった。これらに対して、皮下腫瘍切除が施行された病変は182件であった。病理組織診断では表皮嚢腫が99件、脂肪腫12件、石灰化上皮腫8件、皮膚線維腫5件、血管拡張性肉芽腫5件、エクリン汗孔系腫瘍4件、悪性像なし12件、その他37件であった。また、悪性であったものは7件であり、その内訳は転移性腫瘍4件、悪性黒色腫1件、皮膚線維肉腫1件、平滑筋肉腫1件であった。術前の超音波検査所見と病理組織診断との一致率は、表皮嚢腫が93%、脂肪腫が92%、血管拡張性肉芽腫が80%、石灰化上皮腫が62.5%であった。

【考察】

今回の調査より、皮膚科領域の体表超音波検査は、皮下腫瘍の質的評価目的が最も多く、一方で、他の診療科と比較し、経過観察目的は少ない結果となった。これは良性腫瘍が多いことに加え、腫瘍自体を取り切る症例が多い皮膚科領域の特徴であると考えられる。超音波検査所見と病理組織診断との比較では、日常良く遭遇する表皮嚢腫が最も一致率が高い結果となった。また、脂肪腫や血管拡張性肉芽腫も、比較的一致率が高く、典型的な超音波検査所見が多いことが一致率の高い理由として考えられた。逆に、石灰化上皮腫は、成長過程における変性の程度によって腫瘍内部の性状が異なるために、様々な超音波像を呈することから一致率が低くなったと考えられた。体表超音波検査を施行する注意点として、皮膚表面に近い病変については、病変を押さえすぎず、ゼリー層ができるようにして観察、下床との連続性を確認する際には目的に応じて圧迫、腫瘍内部の血流信号は、随時設定の変更を行い評価している。さらに、皮膚科医と直接コミュニケーションをとることで、より臨床に必要な所見を伝えることができ、超音波検査の有用性を高めることにつながると考えられる。

【まとめ】

今後も皮膚科医と良好な関係を継続し、体表超音波検査がより良い診断の一助となるよう努めていきたい。
連絡先：0598-23-1515（内線240）